末世の聖帝桐壷の意志と須磨・明石巻の天変

望月郁子

内容

一　問題提起
二　源氏の須磨退去
三　須磨の天変
四　明石入道による源氏保護と入道の見た夢の告げ
五　冷泉即位へ

一　問題提起

須磨・明石二巻は、天変と〈夢の告げ〉が、須磨退去の源氏を救い出して明石に導き、同時に内裏の政治の誤りを糾す。超能力が政治に大きく関わりを持つ巻である。桐壷帝は、宿曜の予言に導かれて政治をしてきたが、死後なお、海竜王、住吉の神を通して、自らの政治路線を貫き通す。作者が語っているのは、そういう帝である。源氏物語を読むのに政治に目をつむってはならない。

源氏は宿曜の予言「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。…（澪標［四］）」を背負って誕生している。父帝桐壷は、源氏を〈ただ人〉としたが、同時に〈帝、后の父〉とすることが宿曜によって命じられている。〈帝の父〉にするには、〈藤壷が源氏の子を生む、それを桐壷帝が皇子とし、春宮に立て、即位させる〉が帝桐壷の英断であった。桐壷の敷いたレール上で事は進んだ。(1)

従来、源氏の須磨退去は、源氏による藤壷〈密通〉の罪の償いとしてとらえられてきた。しかし、物語上の事実は〈密通〉で片付く問題ではない。宿曜（仏教上の天の声）が帝桐壷・源氏・藤壷に課した〈ただ人光の子を帝にする〉

ということは、当事者のみに秘められなければならない《絶対矛盾》の強要であり、三者各々の償いを不可欠とする厳しい試練である。

この見地に立って、冷泉の誕生・桐壷院の遺言などを読んできた。[1] この小論では、それをふまえて、須磨・明石の二巻を読んでみたい。

藤壷の試練への対応はすでに見てきた。[2] 宿曜の予言も夢の告げも藤壷にはない。それだけに藤壷は桐壷に対して罪の意識に苦しむ。冷泉誕生後、源氏に対してケザヤカに一線を画し、桐壷院崩御後、出家し、院の遺言通りに、冷泉の即位が実現するように祈りに撤している。

官爵を剥脱されて源氏が須磨に退去したのは、そうすることが〈春宮冷泉を守る〉ことになると判断したからである。藤壷懐妊当初源氏は「おとろおどろしうさま異なる夢を見たまひて、合はする者を召して問はせたまへば、及びもなう思しもかけぬ筋のことを合はせけり。「その中に違ひ目ありて、つつしませたまふべきことなむはべる」と言ふ…（若紫［一四］）」この夢の告げは源氏に覚悟と示唆を与えてきたであろうが、桐壷院亡き後の弘徽殿・右大臣の横暴に対して、忍ぶべき冬の時期という認識とこのままでは終わらないという信念も授けたであろう。その意味で、夢の告げを授からない藤壷の方が不安苦悩は大きい。

春宮冷泉をどう守れるか。弘徽殿・右大臣が牛耳る内裏で、春宮冷泉を誰が守ったのか物語は語らない。母藤壷は出家して三條宮に籠り、参内はできなかったであろう。傍に仕えていたのは、御乳母、王命婦（藤壷の代わり）と夜居の僧（藤壷の母后・藤壷に仕えてきた）の他明らかでない。

須磨にいて源氏が冷泉を守る方法は仏を祈る以外にない。時に琴（きむ）の力も頼ったか。そうして迎えた三月上巳の祓えで、源氏が「八百よろず神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ」と言う途端に天変がおきる。こ

の天変の中、源氏の夢に現われたのは、まず海竜王からの迎え、ついで父故院である。故院の亡霊は、冷泉を即位に導く決定的な動きをするのであるが、須磨の源氏には「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね。」という。故院は住吉の神に守られている。それに呼応するように、明石入道は別に夢の告げを受け、源氏救済の舟の準備をする。「あやしき風が細う吹き」源氏を乗せた舟を明石に導く。

故桐壷院の亡霊・海竜王・住吉の神の超能力によって、源氏と明石入道とが結び付けられる。これは明石姫君誕生を導く。源氏の姫君誕生は、宿曜の予言のいう「后」誕生に他ならない（〔四1〕）。明石入道の女は「海竜王の后になるべきいつきむすめなり（若紫〔三〕）」と京で噂されていた。源氏の須磨での道心を賞でてか、海竜王が源氏の夢に出て「召し」に応じるよう促す。海竜王に魅入られた源氏と海竜王の后と噂された明石上とを父母とする姫君とは、生れ乍らに《竜女》性を備えている。女性は原則として往生できない。《竜女変成》が、女人往生の唯一の道である。宿曜によって厳しい生を余儀なくされた藤壷は、祈りに撤しながらも、死後源氏の夢に成仏できずに現れた。女人往生の道は遥かである。浮舟と横川僧都の出現と、中宮明石による八宮の遺児としての浮舟の庇護をまって、女人往生実現の情況が整う。[3] 女人往生実現のために、明石中宮は必要不可欠な存在である。ことの根底に、若菜上巻で証される入道の一生を決定した夢の告げがある。告げの主は、宿曜の予言の顕現化をめざす桐壷帝以外には有り得ない。帝桐壷が光の「御子」の「后」に期したのが、桐壷帝・光・明石中宮・匂宮と受け継がれる《皇統の血の堅持》と、[4]《女人往生の実現》とであったと見る。

二　源氏の須磨退去

〔二1〕（退去の直接の理由・人々との別れ）

「とあることもかかることも、前の世の報いにこそはべるなれば、言ひもてゆけば、ただみづからのおこたりになむはべる。さしてかく官爵をとられず、あさはかなることにかかづらひてだに、公のかしこまりなる人の、うつしざまにて世の中にあり経るは、咎重きわざに、外国にもしはべるを、遠くはなちつかはすべき定めなどもはべなるは、さまことなる罪に当たるべきにこそはべるなれ。濁りなき心にまかせてつれなく過ぐしはべらむも、いと憚り多く、これより大きなる恥にのぞまぬさきに世をのがれなむと思うたまへ立ちぬる。（須磨［二二］）」

須磨への出発に先立っての左大臣への源氏の挨拶である。格調が高い。

桐壷院は譲位に先立って、春宮に立てる予定の冷泉の「強り」にと、「七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。（紅葉賀［一六］）」と、藤壷と源氏の地位を固めたが、藤壷は出家。源氏一人が、出家した藤壷と連絡を取りながら春宮を守ってきた。

源氏の「官爵」剥脱は、「尚侍の君は、人笑へにいみじう思しくづほるるを、…赦されたまひて、参りたまふべきにつけても…（須磨［一四］）」と、朧月夜との仲が理由とされた。これにより藤壷・春宮冷泉はとにかく安泰を保持できた。朧月夜との仲について、肝心の朱雀帝は、源氏との面談で、「何かは、今はじめたることならばこそあらめ、ありそめにけることなれば、さも心かはさむに、似げなかるまじき人のあはひなりかし」とぞ思ひなして、咎めさせたまはざりける（賢木［二三］）」と鷹揚そのものであった。源氏の「濁りなき心にまかせて」は、朧月夜を犠牲にするのが帝朱雀の意志でないと解っているからである。

「とあることもかかることも、前の世の報いにこそはべるなれば、言ひもてゆけば、ただみづからのおこたりになむはべる。」源氏の述懐である。仏教思想に支配されている当時の知識人の発想であるが、源氏の言う「みづからのおこたり（自分ノ責任）」とは、従来言われている藤壷との関係ではあるまい。藤壷との苦しい仲は、宿曜の然らしむると

ころと源氏は理解できている。桐壷院は源氏を天皇としての政治のできる人材に育てあげた。故院の遺言通りに、朱雀の「御後見」をしようにも、封じられて一切できないことに対する自責と見なければなるまい。そう見れば、後の語りであるが夕霧が朱雀に源氏の往時回顧の心中を語って「かく（周知ノヨウニ）朝廷の御後見を仕うまつりさして（官爵剥脱をさす）、静かなる思ひをかなへむと（道心を研きたいと）、ひとへに篭りゐし（須磨退去）後は、何ごとも知らぬやうにて、故院の御遺言のごともえ仕うまつらず、御位におはしましし世（朱雀在位中）には、齢のほども、身の器物も及ばず、賢き上の人々（弘徽殿・右大臣等）多くて、その心ざしを遂げて御覧ぜらるることもなかりき。（若菜上［三］）」と言うのと整合する。

弘徽殿の監視の厳しい中、人々との別れの挨拶もままならない。二条院門周辺の寂寞さに「世はうきものなりけりと思し知らる（須磨［三］）」

出発の前日、藤壷に挨拶。

「かく思ひかけぬ罪に当たりはべるも、思うたまへあはすることの一ふしになむ、空も恐ろしうはべる。惜しげなき身は亡きになしても、宮の御世（冷泉即位）だに事なくおはしまさば」とのみ聞こえたまふぞことわりなるや。（須磨［七］）」

源氏と藤壷が一体となって守るのは、故院の遺言通り、冷泉を即位させることである。「思うたまへあはすることの一ふしになむ、空もおそろしうはべる」は、宿曜の予言も夢の告げも知らない藤壷の立場に身をおき、藤壷の意識に自分を一体化させた言である。「惜しげなき身はなきになしても宮の御世だに事なくおはしまさば」は、藤壷の「わが身をなきになしても春宮の御世をたひらかにおはしまさばとのみ思しつつ、御行ひたゆみなく勤めさせたまふ。（賢木［三一］）」と、ぴったり一致している。

ついで、桐壷院の墓に参詣。

「ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろさむきほどなり。

なきかげやいかが見るらむよそへつつながむる月も雲がくれぬる（須磨［七］）」

桐壷の亡霊が現れ、源氏の現実を確認する。故院は源氏を見捨ててはいない。

春宮にも藤壷の代わりに仕える王命婦の局に御消息（［八］）。

源氏の離京を「世ゆすりて惜しみきこえ、下には朝廷を譏り恨みたてまつれど、身を捨ててとぶらひ参らむにも、何のかひかはと思ふにや、かかるをりは、人わろく、恨めしき人多く、世の中はあぢきなきものかなとのみ、よろづにつけて思す。（［八］）」弘徽殿の目を恐れて、源氏に恩があっても見舞える人もいない。源氏はこれが世の中だと認識する。

当日（三月二十日余り）は終日紫と別れを惜しみ、月の出を待って「夜深く出でたまふ（［九］）」

「人にいまとしもしらせたまはず、ただいと近う仕うまつり馴れたるかぎり七八人ばかり御供にて、いとかすかにて出で立ちたまふ（須磨［一］）」

「ことさらよそひもなくことそぎて、またさるべき書ども、文集など入れたる箱、さては琴（きん）一つぞ持たせたまふ（須磨［五］）」

琴（きん）一つを持って行くことに留意したい。

［二2］（須磨での日々）

（須磨での住まい）到着。須磨には源氏の「御荘」がある。その司に命じて住む家を作らせる。春も終わる季節である。「水深う遣りなし、植木どもなどして、今はと静まりたまふ心地現ならず。（［一〇］）」

（京との連絡）京に文を届けさせる。宛先は、二条院、藤壷、朧月夜（中納言の君宛）、大殿と宰相の乳母、伊勢（六条御息所）、花散里と、女性に限られている。二条院では、紫の乳母で留守を預かる「少納言は（北山の）僧都に御祈祷のことなど聞こゆ。（僧都は）二方（源氏と紫）に御修法などせさせたまふ。（［一一］）」二条院でも、できることは祈りだけである。

方々の返書を得て、源氏は、

「（紫を）なほ忍びてや迎へましと思す。またうち返し、なぞや、かくうき世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて、明け暮れ行ひておはす。（［一二］）」

左大臣への別れの挨拶に見てきたが、「とあることもかかることも、前の世の報いにこそはべるなれば、言いもてゆけば、ただみづからのおこたりになむはべる。」とする源氏である（前述［二1］）。政治から締め出され、こうして一人に沈潜する今こそと、仏を祈り、宿曜によって背負わされている《絶対矛盾》（前述一）の罪の償いに専心する。そうしながら、故院の遺言である冷泉の即位実現を祈る。これが須磨での源氏の全てであると見るべきである。

（京の政局の動き）七月。赦免されて参内した朧月夜を迎えて、朱雀は、源氏を思い、「院の思しのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」とて涙ぐませたまふに…今まで御子たちのなきこそさうざうしけれ。春宮を院ののたまはせしさまに思へど、よからぬことども出で来めれば心苦しう」など、世を御心のほかにまつりごちなしたまふ人のあるに、若き御心の強きところなきほどにて、いとほしと思したることも多かり。（［一四］）」

と物語は語る。春宮冷泉を廃太子にという動きがある。朱雀は、朧月夜腹の皇子があればと思っている。故院の遺言の二つ、源氏に対しても冷泉に対しても、にともに背き、「罪得らむかし」「心くるしう」と口に出して言いながら、弘徽殿を抑えようともしない朱雀の弱体ぶりである。この冷泉廃太子の動きが実在したことは、橋姫巻に至って証さ

れる。宿曜の予言の顕現化をめざしてきた故院・源氏・藤壷にとって事態は容易ならぬところにさしかかっている。

（源氏の動静）物語はこれに続けて、「須磨にはいとど心づくしの秋風に…」と須磨の浦の秋の憂愁を語りだす。

「御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここもとに立ちくる心地して、涙落つともおぼえぬに枕浮くばかりになりにけり。琴（きん）をすこし掻き鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば、弾きさしたまひて、

恋ひわびてなく音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん

とうたひたまへるに人々おどろきて、めでたうおぼゆるに忍ばれで…（[一五]）」

須磨の夜の「四方の嵐」に源氏が聞き取ったものは、京の政局の緊迫化ではなかったか。遅かれ早かれそうなると源氏にも予測はあった。それだけは何としても回避しなければならない。危機感から琴（きん）を手にした。その響きは、「我ながら」弾くのを止めるほど「いとすごう」聞こえた。琴（きん）は天に通じる楽器だという。「いとすごう」は、荒寥とし過ぎていて霊的存在—海神（竜神）鬼神—を誘い出しそうな雰囲気をいうか。「恋わびて」の歌は、源氏を求める人を紫と見るのが普通のようであるが、源氏の意識にあるのは、紫以上に、春宮ついで藤壷ではないか。朱雀による京の政局の変化の語りに直接続いて語られるこの部分に、源氏の直感が感じられてならない。須磨に来て初めての琴（きん）の登場である。

これに続けて物語は須磨での源氏の日々を語って、

「昼は何くれと戯れ言うちのたまひ紛らはし、つれづれなるままに、いろいろの紙を継ぎつつ手習をしたまひ、めづらしきさまなる唐の綾などにさまざまの絵どもを書きすさびたまへる、…磯のたたずまひ、二なく書き集めたまへり。」

この類の絵が後に絵合での切札となる。

「海見やらるる廊に出でたまひてたたずみたまふ御さまのゆゆしうきよらなること、所がらはましてこの世のものとも見えたまはず。白き綾のなよよかなる、紫苑色などたてまつりて、こまやかなる御直衣、帯しどけなくうち乱れたまへる御さまにて、「釈迦牟尼仏弟子」と名のりて（願文を）ゆるるかに誦みたまへる、また世に知らず聞こゆ。…涙のこぼるるをかき払ひたまへる御手つき黒き御数珠に映えたまへるは、古里の女恋しき人々の、心みな慰みにけり。」

海に向って仏への願文を読誦する源氏の姿、声の、この世ならぬ素晴らしさを説く。願文は、春宮冷泉守護と源氏の罪の償いの願いに他ならない。

八月十五夜の月に、桐壷在世中の殿上の御遊び、今同じ月を眺めているであろう京の方々、院亡きあと春宮に付き添う藤壷から「ここのへに霧やへだつる」と危機感を訴えられた時のこと、同じ夜語り合った朱雀のことと、源氏の思いは、春宮・中宮・帝に集中していく。物語は、朱雀を傾ける意識が源氏に無いことを、

「上の…御さまの、院に似たてまつりたまひしも恋しく思ひ出できこえたまひて、「恩賜の御衣は今此に在り」と誦じつつ入りたまひぬ。御衣はまことに身はなたず、かたはらに置きたまへり。」

と語る。

（源氏を見舞う人）太宰大弐が上京の途中源氏を見舞う（[一六]）。政府役人の源氏訪問はこれが唯一であった。

「御兄弟の皇子たち、睦ましう聞こえたまひし上達部など（[一七]）」は当初は文通したが、弘徽殿の容赦ない批判に、誰も文通できなくなっていた。

（危機感に琴を弾く）須磨のわび住まいも半年余りになると、源氏を誰とも知らない土地の人々の暮らしも身近に見聞きし、生活の変わりぶりが痛感される。冬になる。

「雪降り荒れたるころ、空のけしきもことにすごくながめたまひて、琴（きん）を弾きすさびたまひて、良清に歌うたはせ、大輔横笛吹きて遊びたまふ。心とどめてあはれなる手など弾きたまへるに、こと物の声どもはやめて、涙を拭ひあへり。昔胡の国に遣はしけむ女を思しやりて、ましていかなりけん、この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむことなど思ふも、あらむことのやうにゆゆしうて、…（[一八]）」

風雪が荒れ、凄味のある空をじっと見つめて、源氏は琴（きん）を夢中で弾く。「冬の管弦の遊びは異例」という。(5) 風雪の荒れと空の凄味に源氏が見ているものは、初秋の「四方の嵐」に聞いたもの—春宮身辺の危険—と通じる。「この世にわが思ひきこゆる人などをさやうに放ちやりたらむことなど思ふも、あらむことのようにゆゆしうて」と政局の情報が皆目伝わってこないだけに、危機感がつのる源氏である。琴（きん）の熱演は、仏天や霊界に危機を訴えようとしてか。漢詩と和歌に孤独を託し、「例のまどろまれぬ暁の空に」と眠れない夜が続く。

「夜深く御手水まゐり、念誦などしたまふも、めづらしきことのやうにめでたうのみおぼえたまへば」

夜は人間と霊界との会話可能な時間帯である。深夜の念誦こそが大切と道心を研く。

[二3]（明石入道の登場）

「桐壺更衣の御腹の源氏の光る君こそ、朝廷の御かしこまりにて、須磨の浦にものしたまふなれ。吾子の御宿世にて、おぼえぬことのあるなり。いかでかかるついでに、この君にたてまつらむ」と（母に）言う。…（母、相手にされないと反対）…「罪にあたることは、唐土にもわが朝廷にも、かく世にすぐれ、何ごとにも人にことになりぬる人のかならずあることなり。いかにものしたまふ君ぞ。故母御息所は、おのがをぢにものしたまひし按察大納言の御むすめなり。いと警策なる名をとりて、宮仕に出だしたまへりしに、国王すぐれて時めかしたまふこと並びなかりけるほどに、人のそねみ重くて亡せたまひにしかど、この君のとまりたまへるいとめでたしかし。女は心高くつか

ふべきものなり。おのれかかる田舎人なりとて、思し棄てじ」などいひゐたり。（［一九］）」

「吾子の御宿世」と娘が源氏と結婚するのが前世からの縁ときめている。入道は、源氏の母方の血縁者として、源氏を後見できるのは自分以外にいないと自認してもいる。入道と母の意識に弘徽殿勢力への恐れや遠慮が全くない。政界から身を引き、経済力は持ち、自由に振る舞える立場に身をおいている。京の官僚貴族たちよりも人間が一回り大きい。

「このむすめすぐれたる容貌ならねど、なつかしうあてはかに、心ばせあるさまなどぞ、げにやむごとなき人に劣るまじかりける。身のありさまを口惜しきものに思ひ知りて、高き人は我を何の数にも思さじ、ほどにつけたる世をばさらに見じ、命長くて、思ふ人々におくれなば、尼にもなりなむ、海の底にも入りなむなどぞ思ひける。」

娘は、親に気位高く育てられ、結婚はむつかしいという現実認識がある。

「父君、ところせく思ひかしづきて、年に二たび住吉に詣でさせけり。神の御しるしをぞ、人知れず頼み思ひける。」

「住吉詣で」にかけている。そこに、入道の意識の底に、桐壷更衣の父故大納言と同様、自家の血を皇統の血筋に繋ぐ願望の強さを読まなければなるまい。

［二4］（迎春、大殿の宰相須磨来訪）春になり、「植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて（［二〇］）」南殿の桜、花の宴が偲ばれる。

桐壷帝の左大臣は反体制であるが、嫡男のかつての頭中将は正妻四の君の縁で、宰相（源氏の以前の官位）になり、重んじられている。彼が突然源氏の見舞いに来る。

「住まひたまへるさま」が客の現宰相の目を通して語られる。「言はむ方なく唐めい」て、「竹編める垣しわたして、石の階、松の柱」がいい。主人の服装、調度、御座所、念誦の具と見て、「行ひ勤めたまひけり」と客の目に見える。

「貝つ物」を持って来た海女どもに源氏は生活情況を尋ね、「さまざま安げなき身の愁へを申す（実情ヲ在リノママニ

打チ明ケテ言ウ)。」のを聞き、源氏は「心の行く方は同じこと、何かことなるとあはれに見」御衣どもなどを与えさせる。

「月ごろの御物語」に、客は「若君（夕霧）の何とも世を思さでものしたまふ悲しさを、大臣の明け暮れにつけて思し嘆く」と言う。一夜寝ずに「文作り明かし」、急いで帰京。別れの杯を酌み交わし、詩を吟じ、和歌を贈答し、都の苞（大殿宛か）に加えて黒駒（土地のものか。「世にありがたげなる御馬のさまなり」）を贈る。客は「形見にしのびたまへ」とて、いみじき笛の名ありけるなどばかり」を贈る。

「「いつまた対面たまはらんとすらん。さりともかくてやは」と申したまふに、主、

「雲ちかく飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもりなき身ぞ

かつは頼まれながら、…何か、都のさかひをまた見んとなむ思ひはべらぬ」などのたまふ。宰相

「たづがなき雲居にひとりねをぞ泣くつばさ並べし友を恋ひつつ

かたじけなく馴れきこえはべりて、いとしもと悔しう思ひたまへらるるをり多くなん」

としめやかにもあらで帰りたまひぬるなごり、いとど悲しうながめ暮らしたまふ。」

源氏は、再度京を見るとは思っていないと、宰相に気を許していない。突然の訪問に、返礼はきちんとした。それだけ土地の人々に信頼されている。宰相は「さりともかくてやは」と言いながら、最後の挨拶では、源氏帰京は間違いないとも、微力を尽くすとも言わず、逆境にある源氏を「つばさならべし友」と対等扱いし、「しめやかにもあらで（涙一ツコボサズ）」別れた。残った源氏は「いとど悲しう（自分ノ力ノ無サガ痛感サレテ）ながめ暮らしたまふ。」源氏が我が身にかえてと夜も寝られず案じているのは、春宮冷泉が安泰でいれるかどうかである。肝心のそれに宰相は一言もない。去年七月朱雀は朧月夜相手に、冷泉廃太子の動きがある、朧月夜腹の皇子が欲しいと言った（前述「二

2」（京の政局の動き））。宰相がそれを知らないとは考えにくい。後出の宇治八宮がかつがれていた。八宮の北の方は「昔の大臣の御むすめなりける、（橋姫［一］）」である。この「昔の大臣」とは、ムカシの語義からして、桐壷帝の左大臣が第一候補にあがるが、桐壷帝と源氏をバックアップしてきた左大臣が桐壷帝が決めた春宮を廃太子にしようとは考えにくい。当該の宰相の正妻四の君は弘徽殿の妹である。弘徽殿側が、宰相の妹を北の方とする八宮を推し出させようとすれば、宰相はその気になったのではないか。後に宰相の嫡男柏木の遺書を預かった弁の尼が八宮家に篭ったのも、八宮家と宰相との関わりの深さを示唆する。「つばさならべし友」に、源氏に対する宰相の優位意識が顔を覗かせている。この訪問に宰相の源氏に対する監視役的一面が感じられてならない。

三　須磨の天変

［三1］（上巳の祓）須磨に退去して一年になろうとしている。

「弥生の朔日に出で来たる巳の日「今日なむ、かく思すことある人は、禊したまふべき」（須磨［二一］）」

と勧められて、源氏は須磨の浜辺で、陰陽師を招いて祓えをする。源氏が

「八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ」

と身の潔白を神々に訴えるや、突如、雨風が激しく降り吹き、「うらうらとなぎわた」っていた海面に大波が立ち「雷鳴りひらめく」となった。人々は「かくて世はつきぬるにや」と恐れる中、源氏は「のどやかに経うち誦じておはす。」日暮とともに雷は静まったが風は止まない。

「暁方みなうち休みたり。君もいささか寝入りたまへれば、そのさまとも見えぬ人来て、「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」とてたどり歩くと見るに、おどろきて、さは海の中の竜王の、いといたうものめでするものにて、

見入れたるなりけりと思すに、いとものむつかしう、この住まひたへがたく思しなりぬ。」

儀式の中での源氏の歌に海竜王が応え、源氏の夢に異形のものが現れ、海竜王の招きになぜ応じないのかと言う。まさに言霊の世界である。竜王は仏法の守護神である。須磨に来て以来、源氏は、「かくうき世に罪をだに失はむと思せば、やがて御精進にて、明け暮れ行ひおはす」と、仏を祈り、宿曜によって背負わされている《絶対矛盾》の罪の償いに専心し、故桐壷院の遺言である冷泉の即位実現を祈り続けてきたこと、前述（[二2]）の通りである。風雨、波の音、空の凄味などに危機を読取り、夜、琴（きん）に心の騒ぎを託して仏天に訴えた。海に向かっての願文読誦、深夜の念誦など道心を研き続けてきた。現にこの風雨雷の中、源氏は「のどやかに経うち誦しておはします」である。海竜王が源氏に一目おいて当然であろう。

問題は、今日の祓えの儀式の中で、源氏は「八百よろづ神もあはれと思ふらむ…」と神々に訴えているのに、間髪入れず竜王がなぜ反応したのか、神々に先んじて竜王がなぜ源氏を支配下に入れなければならないのかである。

思うに、源氏は、「犯せる罪」がないとはいえ、朝廷により犯罪者とされている存在である。直接神に訴えること自体が不敬不遜となりかねない。今源氏を救えるのは、仏法の守護神海竜王以外にあるまい。海竜王はまずそれを源氏にわからせなければならなかったのではないか。北山僧都をして「いとむつかしき日本の末の世」と落涙させる末世である。

物語は須磨に続く明石巻の冒頭で海竜王による源氏のさらなる試練を語る。

[三2]（海竜王による試練）

（異状な風雨雷の範囲と連続）

「なほ雨風やまず、雷鳴り静まらで日ごろになりぬ。（明石[一]）」源氏も気がめいってくる。「御夢にも、ただ同じ

さまなる物のみ来つつ、まつはしきこゆと見たまふ。」

と源氏は海竜王にとりつかれている。

二条院から悪天候をついて使者が来る。

「京にも、この雨風、いとあやしき物のさとしなりとて、仁王会など行なはるべしとなむ聞こえはべりし。内裏に参りたまふ上達部なども、すべて道閉ぢて、政も絶えてなむはべる。…いとかく地の底徹るばかりの氷降り、雷の静まらぬことははべらざりき。」

と言う。京では風雨雷の異常さは「物のさとし」即ち仏神などによるこの世の人々への啓示と受けとめられていること、政治がストップ状態であることが須磨の源氏に伝わった。

源氏がそう知った「そのまたの日の暁より」、更に風が強まり、高潮が押し寄せ、波音がすさまじくなり、落雷がはじまる。供人もうろたえる。〈さとし〉を知れとばかりに、海（海竜王）が招きに応じない源氏にその全威力を示すかのごとくである。

（住吉の神に願立て）

「君は御心を静めて、何ばかりのあやまちにてかこの渚に命をばきはめん（過チナゾシテイナイ、ココデ死ヌハズガナイ）と強う思しなせど、いともの騒がしければ、いろいろの幣帛捧げさせたまひて、「住吉の神、近き境を鎮め護りたまふ。まことに跡を垂れたまふ神ならば助けたまへ」と多くの大願をたてたまふ。（[二]）」

源氏は須磨へ来て以来、仏を頼って祈りに専心してきたが、物語の語るかぎり、住吉の神への信仰は取り立ててしてはいない。

即位式に続く〈八十嶋祭〉は住吉で行なわれたという。[6] 住吉の神は皇統を護る神である。源氏は官爵を剥脱されて

の須磨退去の身である。本人が身の潔白に自信があっても、立場上、住吉の神に接近することは許されない。「物のさとし」を熟慮の末、住吉の神に大願を立てなければならないとなった。本地垂跡の立場に立てば、この一年須磨で専心してきた仏への祈りを、神への祈りに通じさせることができる。「まことに跡を垂れたまふ神ならば…」とする以外に、この土壇場で、源氏自身が住吉の神に願を立てる方法はなかった。としても、住吉の神を「近き境を鎮め護りたまふ」と、距離をおいての立願しかできない。

「(供人も)身に代へてこの御身ひとつを救ひたてまつらむととよみて、もろ声に念じたてまつる。『帝王の深き宮に養はれたまひて、いろいろの楽しみに驕りたまひしかど、深き御うつくしみ大八州にあまねく、沈める輩をこそ多く浮かべたまひしか。今何の報いにか、ここら横さまなる浪風にはおぼほれたまはむ。天地ことわりたまへ。罪なくて罪にあたり、官位をとられ、家を離れ、境を去りて、明け暮れやすき空なく嘆きたまふに、かく悲しき目をさへ見、命尽きなんとするは、前の世の報いか、この世の犯しかと、神仏明らかにましまさば、この愁へやすめたまへ』と御社の方に向きてさまざまの願を立てたまふ。」

供人が『』内の願文をつくり、それを「もろ声に(声ヲ揃エテ)念じ(一心ニ読ミ)奉る」のも源氏のこの実情を踏まえてのことである。文末の「たまふ」は、源氏も同座し心に念じ、ともに願立てをすると採れば説明がつく。

(海竜王に願立て。源氏の家の廊に落雷、廊炎上)

「また海の中の竜王、よろづの神たちに願を立てさせたまふに、いよいよ鳴りとどろきて、おはします廊に落ちかかりぬ。炎燃え上がりて廊は焼けぬ。心魂なくてあるかぎりまどふ。」

「よろづの神たち」は、海竜王配下の海の神々か、上巳の祓えの「八百よろづの神」と同一か、決しがたい。願立てされた海竜王は、源氏が住吉の神への願立て、「よろづの神たち」への願立てを終えたと見、須磨の源氏の家の廊を落雷

炎上させ、源氏が須磨に住めない情況を作り出す。これは、海竜王による源氏の須磨退去自体の破壊である。

「やうやう風なほり、雨の脚しめり、星の光も見ゆるに、…君は御念誦したまひて、（何のさとしか）思しめぐらすに、いと心あわたたし。月さし出でて…（[三]）」

海竜王の源氏への試練は終わった。

[三3]（桐壷院の亡霊の夢の告げ）

「終日にいりもみつる雷の騒ぎに、さこそいへ、いたう困じにければ、心にもあらずうちまどろみたまふ。かたじけなき御座所なれば、ただ寄りゐたまへるに、故院ただおはしましさまながら立ちたまひて、「などかくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて引き立てたまふ。「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」とのたまはす。いとうれしくて、「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚に身をや棄てはべりなまし」と聞こえたまへば、「いとあるまじきこと。これはただいささかなる物の報いなり。我は位にある時、過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて、この世をかへりみざりつれど、いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」とて立ち去りたまひぬ。（明石[三]）」

故院の亡霊は、「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」と命じる。夢に現われた海竜王の召しが気になっている源氏が「今はこの渚に身をや棄てはべりなまし」と聞けば、故院は「いとあるまじきこと」と教える。故院の告げで問題とすべきは、「これはただいささかなる物の報いなり（1）」と「我は位にありし時過つことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終ふるほど暇なくて（2）」である。

（2）の「犯し」は、在位中に「過つこと」はなかったにもかかわらず、「おのづから」あったことだという。これ

は、宿曜の予言が帝桐壷に課した《絶対矛盾》即ち「〈ただ人〉源氏の子を帝にする」ための必要不可欠な「犯し」以外にはあり得まい。ここの「おのづから」は必要不可欠の意である。「おのづから犯しありければ」と故院が源氏に報せるのは、「おのづから」の「犯し」が源氏に通じる事柄であることを示唆する。

宿曜の予言の顕現化の方法として桐壷帝が英断したのは、〈藤壷が出産した源氏の子を桐壷が皇子とし即位させる〉であった。桐壷巻の後三分の一の幼い源氏の育て方に桐壷帝のそれに向けてのリードが顔をのぞかせている。(1) 藤壷を犯した源氏は、帝が冷泉懐妊を知った頃授けられた夢の告げから、ことを、皇統を守るために源氏に課された天命と受けとめたであろう。宿曜の予言も夢の告げも藤壷は授からない。それだけ藤壷は苦しむ。源氏との逢う瀬を徹底して拒絶する。源氏は藤壷への恋に課された苦しさに耐える外ない。桐壷院の遺言を朱雀帝は実行できない。源氏も藤壷も孤立無縁の中、それぞれ、院の遺言である春宮冷泉の即位実現を祈る。(2) 宿曜の予言は、桐壷帝・藤壷・源氏三人の当事者のみに秘められなければならない、皇統を護るための《絶対矛盾》の、三者への強要であり、三者それぞれの償いを不可欠とする厳しい試練である。

院の亡霊の告げにもどる。桐壷院にとっての「その罪」とは、〈ただ人〉源氏の子を立太子させたことであろう。その償いに「この世をかへりみ」る「いとま」がなかったというが、今、来れたのは、故院の償いの少なくとも主要な部分は終わり、冷泉即位の条件を故院がクリアしたからに他なるまい。「かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる。」といって亡霊は姿を消す。「かかるついでに」は故院の第一目的が源氏の救出であることを示す。

(1) の「これはただいささかなるものの報いなり」であるが、「これ」はこのところの天変をさし、「ものの報い」は弘徽殿・右大臣勢力の横暴に対する天の報いをいう。それを故院の亡霊は「ただいささかなる」簡単に処理できる問題だという。(2) の難題と対決してきた故院の大きさである。

夢から覚めた源氏は「我かく悲しびをきはめ、命つきなんとしつるを助けに翔りたまへるとあはれに思すに、よくぞかかる騒ぎもありけると、なごり頼もしうおぼえたまふことかぎりなし。」

［三4］（住吉の神の導き）　源氏の夢に現われた故院の亡霊は、「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」と源氏に命じた。そのまま「さらに御目もあはで暁方になりにけり。（明石［三］）」

「渚に小さやかなる舟寄せて、人二三人ばかり、この旅の御宿をさして来。…「明石の浦より、前の守新発意の、御舟よそひて参れるなり。…事の心とり申さん」と言ふ。（［四］）」

あの風雨の中を舟を出すとはと不審に思いながら良清が舟に行くと、入道がいて、

「去ぬる朔日の夢に、さまことなる物の告げ知らすることのはべりしかば、信じがたきことと思うたまへしかど、『十三日にあらたなるしるし見せむ。舟をよそひ設けて、かならず雨風止まばこの浦に寄せよ』とかねて示すことのはべりしに、いかめしき雨風、雷のおどろかしはべりつれば、他の朝廷にも、夢を信じて国を助くるたぐひ多うはべりけるを、用ゐさせたまはぬまでも、このいましめの日をすぐさず、このよしを告げ申しはべらんとて、舟出だしはべりつるに、あやしき風細う吹きて、この浦に着きはべりつること、まことに神のしるべ違はずなん。ここにも、知ろしめすことやはべりつらむ。…」

と言う。入道が夢の告げを受けた「去ぬる朔日」、源氏は上巳の祓えをし、天変が起こり、暁方の夢に、海竜王の招きに応じろと告げられた。入道の夢に現われたのは「さまことなる物」、源氏の夢では「そのさまとも見えぬ人」という。

「十三日」を入道は「このいましめの日」といい、告げに従ったところ「あやしき風細う吹きて、この浦に着」いたという。今夜が十三日である。「まことに神のしるべ違はず」という入道は、一人女を源氏に奉りたいと住吉の神に年来祈ってきた（前述［二3］）。源氏も住吉の神へ願立ては済ませた。故院の亡霊が夢に現れ「住吉の神の導きたまふ

ままに、はや舟出してこの浦を去りね」と命じられ、「さらに御目もあはで」いるところへ小舟が来たのである。

良清の報告を聞いて、

「君思しまはすに、夢現さまざま静かならず、さとしのやうなることどもを、来し方行く末思しあはせて、「…まことの神の助けにもあらむを背くものならば、またこれよりまさりて、人笑はれなる目をや見む。…夢の中にも父帝の御教へありつれば、また何ごとをかは疑はむと、思して…「…うれしき釣舟をなむ。かの浦に静やかに隠ろふべき隈はべりなんや」とのたまふ。かぎりなくよろこびかしこまり申す。「ともあれかくもあれ、夜の明けぬさきに御舟に奉れ」とて、例の親しきかぎり四五人ばかりしてたてまつりぬ。例の風出で来て、飛ぶやうに明石に着きたまひぬ。ただ這ひ渡るほどは片時の間と言へど、なほあやしきまで見ゆる風の心なり。」

「夜の明けぬさきに」迎えの小舟に乗ると「例の風」が吹き「飛ぶやうに明石に」着く。「夜の明けぬさき」の強調に、夜が神仏と人間が通じ合える時間帯、昼とは異質の時間帯であるとする当時の人々の意識が伺える。

「上巳の祓え」の場、即ち儀式の場で、源氏が「犯せる罪のそれとなければ」と「八百よろづ神」に言挙したのに即刻反応して始まった天変は、須磨と京を範囲下におき、「十三日」須磨の源氏の家の一部を落雷炎上させて、静まり、その暁に源氏の須磨脱出、明石入道による源氏保護を実現させた。源氏は「四方の海の深き心（絵合［九］）」を体験した。

明石入道は、夢で特定された「十三日」を「このいましめの日」という。「十三日」の夜は、死者を含めて神仏が特定の人間に対して行動を起こす日であるらしい。人間は勝手な行動を謹まなければならなかったのではないか。推測の域を出ないが、現在でも盆は十三日からはじまる。「十三日」は死者がこの世に戻れる日なのではないか。とすると、故桐壷帝が自分がこの世に戻れる十三日を源氏救出の日として、海竜王、住吉の神に働き掛けて天変が始まり、こと

が成就したとなる。

ちなみに「十三日」が問題とされる物語中の事例に今一つ、東屋巻で薫が三条の家にいた浮舟を強引に宇治へ連れ出す場面がある。(7)

四　明石入道による源氏保護

［四1］（入道への夢の告げ）物語の巻序に添わず、時間の経緯に従って、まず、明石入道が授かった夢の告げから取り上げたい。

若菜上巻に至って、明石女御が春宮の男皇子を出産。それを知った明石入道が娘の明石上に辞世の手紙を送る。

「伝にうけたまはれば、若君は、春宮に参りたまひて、男宮生まれたまへるよしをなん、深くよろこび申しはべる。そのゆゑは、みづからかくつたなき山伏の身に、今さらにこの世の栄えを思ふにもはべらず、過ぎにし方の年ごろ、心ぎたなく、六時の勤めにも、ただ御事を心にかけ、蓮の上の露の願ひをばさしおきてなむ、念じたてまつりし。わがおもと生まれたまはむとせしその年の二月のその夜の夢に見しやう、みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、みづからは、山の下の蔭に隠れて、その光にあたらず、山をば広き海に浮かべおきて、小さき舟に乗りて、西の方をさして漕ぎゆくとなむ見はべりし。夢さめて、朝より、数ならぬ身に頼むところ出で来ながら、何ごとにつけてか、さるいかめしきことをば待ち出でむと心の中に思ひはべりしを、そのころより孕まれたまひにしこなた、…賤しき懐の中にも、かたじけなく思ひいたづきたてまつりしかど、力及ばぬ身に思うたまへかねてなむ、かかる道におもむきはべりにし。また…この浦に年ごろはべりしほども、わが君を頼むことに思ひきこえはべりしかばなむ、心ひとつに多くの願を立てはべし。その返申し、たひらかに、思

ひのごと時に逢ひたまふ。若君、国の母となりたまひて、願ひ満ちたまはむ世に、住吉の御社をはじめ、はたし申したまへ。さらに何ごとをかは疑ひはべらむ。このひとつの思ひ、近き世にかなひはべりぬれば、…

命終はらむ月日もさらにな知ろしめしそ。いにしへより人の染めおきける藤衣にもなにかやつれたまふ。ただわが身は変化のものと思しなして、老法師のためには功徳をつくりたまへ。この世のたのしみに添へても、後の世を忘れたまふな。…」

さて、かの社に立て集めたる願文どもを、大きなる沈の文箱に封じ篭めて奉りたまへり。（若菜上［二八］）」

入道が夢の告げを授けられたのは、明石上誕生の「その年の二月のその夜」であったという。「その夜」の「その」は現実に懐妊した日と同一の日を指すと見る。明石に移った源氏（当初数え年二十七歳）に娘のことを話して、入道が娘の年令を「住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。（明石［九］）」というのを根拠にすれば、当該の夢の告げは源氏が十歳の二月となる。前述（［三4］）のごとく、須磨から明石への源氏の救済に故桐壷帝による海竜王、住吉の神への働き掛けが大きかったと見ることができるならば、明石入道による源氏保護の原点となる当該の夢の告げも、帝桐壷の意志が源泉ではあるまいか。源氏は七歳で読書始めをし、十二歳で元服した。七歳から十二歳までの間に、賜姓源氏と藤壷の入内があった。賜姓源氏に関連して帝桐壷は宿曜の予言の顕現化を熟慮した。「帝、后かならず並びて生まれたまふべし」の「帝」については既に論じてきたが、「后」がある。桐壷帝は非業の死を遂げた桐壷更衣を何としても成仏させなければ気がすまなかったであろう。《女人往生》は竜女変成以外に方法がない。故更衣の血筋に竜女となるべき女子を誕生させ、源氏と結ばせて、宿曜が予言する「后」となるべき女子を生ませる。その后に男性に引けを取らない能力を発揮させる、変成男子つまり竜女変成をさせれば《女人往生》に至れる。その「后」にひかれて、后にとって父方の祖母にあたる桐壷更衣も、宿曜に課された試練をそれと知らずに苦

しむ藤壷も救われるとなるのではないか。その実現にむけて帝桐壷が頼れるのは、故更衣の従兄弟（後の明石入道）一人しかいない。桐壷帝の海竜王、住吉の神への祈りが故更衣の従兄弟への当該の夢の告げとなったのではないか。源氏十歳の時点で若かった明石入道に当該の夢の告げを授けることのできるのは、宿曜の予言を知る帝桐壷以外に存り得たであろうか。

入道の明石の上宛ての辞世の手紙で、夢の告げ以外の、明らかにされることに言及しておきたい。この夢の告げを受けた頃から母が懐妊し、娘は京で生まれた。「力及ばぬ身に思うたまへかねてなむ、かかる道におもむきはべりにし」は、「近衛中将を棄てて申し賜れりける司（播磨国守）（若紫［三］）」と呼応する。夢の告げを深く信じ、夢の告げに背かないように娘を育てるために京を棄てたのだという。夢の告げに支えられたとはいえ、弘徽殿腹の第一皇子を春宮とする政界に見切りをつけ、播磨国守として財力を貯え、そのまま播磨で出家し、弘徽殿、右大臣勢力に何憚ることのない立場を保持して自由に生き、自家の血筋を皇統に繋ぐ明石入道の生きざまは、不運を嘆いて零落する多くの京の貴族達に対し傑出している。大きな人物である。その人柄を帝桐壷が見込んで自然であろう。「若君、国の母となりたまひて、願ひ満ちたまはむ世に、住吉の御社をはじめ、はたし申したまへ。」に入道の願望の所在が明白である。その日を思って、后の母方の身分の低さを娘（明石上）が問題にしないように「わが身は変化のものと思しなして」入道の喪になど服すな、「老法師のためには功徳をつくりたまへ。」と遺言する。

［四2］（明石における源氏の基本姿勢）入道は源氏を「浜の館（本邸）に迎えた。「月ごろの御住まひよりは、こよなく明らかになつかし。（明石［五］）」「人しげき厭ひはしたまひしかど、ここは、また、さまことにあはれなること多くて、よろづに思し慰まる。（［六］）」「かくおぼえなくてめぐりおはしたるも、さるべき契りあるにやと思しながら、なほかう身を沈めたるほどは、行ひよりほかのことは思はじ…（［七］）」で、時を過ごす。

五　冷泉即位へ

須磨で源氏の夢に現われた桐壷院は「かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」と言い残して立ち去った。物語は源氏が入道の娘からはじめて返歌を手にするところまで語り、内裏での桐壷院にもどる。

「その年、朝廷に物のさとししきりて、もの騒がしきこと多かり。三月十三日、雷鳴りひらめき雨風騒がしき夜、帝の御夢に、院の帝、御前の御階の下に立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御事なりけんかし。（〔一一一〕）」

朱雀は母弘徽殿にうちあけると、母后は「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々しきやうに、思し驚くまじきこと」と突っぱねる。仏天の予言も夢の告げも体験したことのない弘徽殿にことの恐ろしさが通じないとしても、こう言われて引き下がるのが朱雀である。

「睨みたまひしに見あはせたまふと見しけにや、御目にわづらひたまひてたへがたう悩みたまふ。…太政大臣（旧右大臣）亡せたまひぬ。…大宮もそこはかとなうわづらひたまひて、ほど経れば弱りたまふやうなる」

朱雀が源氏に無実の罪を着せた報いだから、もとにかえすと度々言っても母后が承知せず、「月日重なりて、御悩みどもさまざまに重りまさらせたまふ。」そのまま新年を迎える。眼病の帝を世間が黙っていなくなる。

「当帝の御子は、右大臣（髭黒の父）のむすめ、承香殿女御の御腹に男御子生まれたまへる、二つになりたまへばいといはけなし。春宮にこそは譲りきこえたまはめ、朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人を思しめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふことといとあたらしうあるまじきことなれば、つひに后の御諫めをも背きて、赦されたまふべき定め出で来ぬ。…七月二十余日のほどに、また重ねて京へ帰りたまふべき宣旨くだる。（〔一一六〕）」

弘徽殿の抵抗は朧月夜腹の朱雀の皇子の出現を待ち続けてのことであったであろう。

注

(1) 望月郁子「桐壷帝の抵抗・挫折・再起―桐壷巻を帝サイドから読む―」二松学舎大学「人文論叢第67輯」二〇〇一年十月
望月郁子「帝桐壷にとっての宿曜の予言と冷泉の誕生」二松学舎大学「人文論叢第68輯」二〇〇二年一月

(2) 注1の二つ目の論

(3) 望月郁子「女往生への道―明石中宮の役割と浮舟の受難」大学院紀要「二松15」二〇〇一年三月

(4) 望月郁子「大君の死と中君の結婚―皇統の血の堅持―」二松学舎大学「人文論叢第61輯」一九九八年十月
望月郁子「「前坊」廃太子」二松学舎大学「人文論叢第63輯」一九九九年十月
注1のはじめの論文

(5) 『完訳日本の古典 源氏物語三』47頁脚注二五

(6) 坂下圭八

(7) 「宿直人も門開けて出づる音す。おのおの入りて臥しなどするを聞きたまひて、人召して車、妻戸に寄せたまふ。かき抱きて乗せたまひつ。誰も誰も、あやしう、あへなきことを思ひ騒ぎて、「九月にもありけるを。心憂のわざや。いかにしつることぞ」と嘆けば尼君もいといとほしく、思ひの外なることどもなれど、「…九月は明日こそ節分と聞きしか」と言ひ慰む。今日は十三日なりけり。(東屋［四〇］)」
「誰も誰も、あやしう、あへなきことを思ひ騒ぎて」の理由が「今日は十三日なりけり」である。それは浮舟にも薫にも解っていて当然である。薫の意識が問題である。異腹の妹浮舟を宇治に保護する現場を大君に見てもらいたかったのではないか。それが大君に対する薫の誠意と信じていたのではないか。浮舟には薫の本心が自分にではなく、大君に向かっていると三条の小家を連れ出される時から見抜けていたであろう。